「底が突き抜けた」時代の歩き方 438

理想はどうして現実の中では地獄になってしまうのか

山城むつみが連載コラム（『新潮』04・7）で「『地上の楽園』再考」と題して、《悪魔的首領の愚劣きわまる狂態》によって地獄が出現してしまっているかのような《溢れんばかりの北朝鮮報道》に対して、《この世の地獄をもたらしている張本人を我々はどのようにして悪魔的あまりに悪魔的なものとして想像したがるのか》と異議を唱えている。指導者が悪魔的であったが故に、悪魔的な地獄が出現することになったのか。事はそう単純ではあるまい。ここで見逃されているのは、悪魔的であることは必ずしも悪魔的なかたちを伴って訪れるわけではないということだ。むしろ悪魔的であることはしばしば、悪魔的であることは全く正反対のかたちをとって我々の目の前に現れてくると考えたほうがよい。

悪魔的であることが悪魔的なかたちを伴ってやってくるのであれば、さほど賢くはない我々といえども、そんな悪魔的なかたちに簡単に引きずられることはない。悪魔的であることは全く正反対のかたち、たとえば天使的なかたちを伴って訪れてくるが故に、我々には厄介なのである。更にもっと厄介なのは、悪魔的であることが天使的であることを意図して偽装するわけではないということだ。愚かな我々の中にも少数ではあるが、その正体を見抜く目をもつ者は必ず存在しており、悪魔よ、退け、と大声で叫んでくれるだろう。そのような活眼の士ですら、悪魔的であることが天使的なかたちを伴って我々の目の前にやってくるのを大いに歓迎して、その偉大なる事業を先導しようとするのは、天使的なかたちとして現れているものの中には微塵も悪魔的なものは含まれておらず、我々全員が力を合わせて天使的なかたちとして現れているものを担ぎさえすれば、その天使的なかたちは我々の掌中にやがて収められるかのように、指導者を含む誰もが思い込み、目を輝かせるからだ。

天使的であることがどうしても悪魔的になってしまう、ということ喝破したのは、二世紀前のロシアの作家＝ジャーナリストのドストエフスキーであった。山城氏は彼の『作家の日記』の中の「現代の偽りの一つ」から、《或る複雑多様な動機があつて、そのためにこの上なく心の清らかな純朴な人でさえ、同様の奇々怪々な悪事に引かれるということがありうる。繰り返しになるが、私が長編『悪霊』で描き出そうと試みたのはそれらの動機である。わが国では、決して厭らしい人間でなくてもこの上なく忌まわしく厭らしい行為をなしうるという点にこそ恐ろしさがあるのだ》という個所を抜き出して、ドストエフスキーが『悪霊』を書くきっかけとなった、目を背けるおぞましいリンチ殺人を惹き起こすネチャーエフ事件に対する彼のスタンスをこう説明する。

事件の《青年たちは感受性を失った無教養な不良連中だったにちがいないと言う良識派の意見に対してドストエフスキーは、いや、彼らは、人類の未来に関して高邁な理念を抱いた純粋な青年たちだったにちがいないと反論している。彼らを擁護したいからではない。良識派に従うと事件の本当の恐ろしさが見失われてしまうからだ。》このネチャーエフ事件の同列に、同様のリンチ殺人を惹き起こした連合赤軍事件や、オウムのサリン撒布事件を加えると、より問題が鮮明となってくる。いずれの事件も《感受性を失った無教養な不良連中》によって担われたわけではなく、《人類の未来に関して高邁な理念を抱いた純粋な青年たち》によって担われた。世の良識派たちが《感受性を失った無教養な不良連中》とみなしたのは、当初愚行は愚かな連中によって惹き起こされるという図式を信じていたし、信じたかったからだ。つまり、事件を惹き起こす彼らの場所と自分たち良識派の場所とは地続きではありえないと思い込みたかったからだ。教養ある我々なら絶対に惹き起こす筈のない全く無関係な事件なのだ、と。

ドストエフスキーはいや、事件は我々が望まない《感受性を失った無教養な不良連中》の間から噴出したのではなく、まさに我々が望んでいる申し子のような、《人類の未来に関して高邁な理念を抱いた純粋な青年たち》の中から噴出したことを明らかにしたのだ。事件を惹き起こした青年たちがどうして我々と切断されているなどといえよう、彼らのような存在をこそ、我々は積極的に生み育ててきたのではなかったのか、と。つまり、愚行は愚かな連中によってではなく、聡明な連中によってこそ惹き起こされることを人々に突きつけたのだ。我々の社会が《人類の未来に関して高邁な理想を抱》く子供たちの育成を目指し、そのことを人類の進歩として位置づけているなら、そのまさに人類の進歩へと向かおうとする我々の行程の中におぞましく忌まわしい事件の発生が沈潜していることを、ドストエフスキーは見通していたのである。

ドストエフスキーがこう喝破してから二世紀が経過し、同種の事件が頻発するようになって、世の良識派もなるほど事実として、事件は無教養な連中によってではなく、純粋に教養ある連中によって惹き起こされていることを認めねばならなくなった。もちろん、ドストエフスキーの省察に学ぼうとしたわけではなかった。世の良識派は自分たちの良識の根柢が突き崩されていくのをただ単に呆然と眺めていたわけではなく、すでに失効している教養と無教養を別け隔てる壁に代わりうる別の壁をもちだして、自分たちと事件を起こす連中とが重なり合うことがないのをなんとか証明しようとした。連合赤軍事件では偏狭な革命イデオロギーが、オウムのサリン事件では偏狭な宗教イデオロギーが槍玉に挙げられ、それらの偏狭なイデオロギーが生み出される土壌が現行社会の中にあり、教養ある青年たちの知性がその偏狭なイデオロギーの中での自己実現を願っていくようなものであったことなどには、全く目は向けられなかった。

《ヨーロッパの進歩思想の、現代における唱導者達すべての目的が人間愛に溢れた壮大なものであるということも大いにあり得る。そう仮定してもいい。しかし、引き換えに、

私には次のことが疑いのないことに思えるのだ。これらの現代の最高の教師達のすべてに、古い社会を破壊し新たに建設し直す万全の機会を与えてみるがいい、そうすれば、暗愚、混沌、これ以上はないというほど粗野で盲目的で人間不在のものが出来て来て、その建物は、完成する前に、人類の呪詛のもと瓦解するにちがいない、と。》

ドストエフスキーの同書の別の一文を引用して、《この作家 = ジャーナリストには、地獄そのものが恐ろしいのではない。そこに君臨するサタンが恐ろしいのでもない。楽園を建設しようとするヒューマンな人間が地獄を来してしまうその屈折点に顔をのぞかせているものこそ真に恐ろしいのだ。彼はそこに正真正銘の悪魔を見出したから『悪霊』を書いたのだが、それは言いかえれば、そこにこそ人間が最も不可解なおぞましい謎として立っていたということにほかならない》と、山城氏は指摘する。『悪霊』が書き始められた1870年にはレーニンが生まれ、その翌年1871年にはパリ・コンミュンが起こっている。ドストエフスキーはネチャーエフ事件を題材にした『悪霊』の中で、来たるべく社会主義の理想に突き動かされた我々の社会が、《暗愚、混沌、これ以上はないというほどの粗野で盲目的で人間不在のもの》に覆われることになるのをすでに予見していたといえる。

さて、《洪水のような北朝鮮報道》に見落とされているのは、以上のドストエフスキーの視点である。北朝鮮の末期的症状に腐敗しきった独裁国家の必然的な帰結を覗き込むばかりで、《人間というものが不気味な解きようのない問いとしてそこに現れて来る》様相を垣間見ることはない、と山城氏はいう。《ドストエフスキーなら逆に、この国の理念や指導思想の精髓に「人間愛に溢れた壮大な」目的を見出していたらろう。そして、「この上なく心の清らかな純朴な」人々が高邁な理念と理論に導かれて幸福な未来社会の建設に向け、真摯に実践を積み重ねてゆくといつものまにか「奇々怪々な悪事」に引かれ、ついには「暗愚、混沌、これ以上はないというほど粗野で盲目的で人間不在のもの」をもたらしてしまうという逆説に眼を凝らしたにちがいない。逆説的言辞を弄して悦に入るのではなく、歴史そのものの蔵している逆説が悪魔の姿をとって現前に生きている様に心底、恐れ慄くばかりだったらろう。》

どんなに悪魔的な独裁者の下で地獄的な様相を呈していようと、北朝鮮とて例外ではありえない。《「この上なく心の清らかな純朴な」人々が高邁な理念と理論に導かれて幸福な未来社会の建設に向け、真摯に実践を積み重ねてゆく》なら、「地上の楽園」が自分たちの目の前に拓かれてゆくと思っていた筈である。実際、この国にも《人間愛に溢れた壮大な》目的に貫かれた主体思想チュチュエがあった。山城氏は、主体思想の事実上の創始者であり確立者であるアンソウヨク黄長燁の『金正日への宣戦布告』から次の箇所を抜き出す。

《わたしは個人の生命は有限だが、人類の生命は無限だという点に着眼し、個人の生命と社会的集団の生命の相互関係にかんする見解を定立し、従来の人本主義の自主的な地位と創造的役割を基礎とした唯物論と弁証法を全面的に改作した。

重ねて主張するが、わたしは、マルクスの唯物弁証法はもっとも単純な物質的存在を基準として展開した理論であるため、運動の主体である人間が積極的役割を果たす成熟した人間社会には合わず、したがって理論を人間を中心に改作しなければならないと考えた。わたしは人間中心に改作した唯物論と弁証法を「主体の唯物論」、「主体の弁証法」と呼んだ。》

山城氏によれば、《主体思想とは、マルクス主義は客観的法則のみ強調しすぎて、主体である人間の役割をしかるべく評価していないという観点から、歴史における人間の主体的能動性に重心を移してマルクス主義思想を改作したものだと言える。ポイントは二つある。一つは「人間中心」ということ、もうひとつは「個人の有限の命と人類の無限の命を結合させて、みな一緒に生きがいをもって生きる未来社会を建設」するということである。》主体思想のいう「人間中心」が抽象的な、どこにも現実的に存在していない「人間中心」であり、もう一つの「個人の有限の命と人類の無限の命を結合させて、みな一緒に生きがいをもって生きる未来社会を建設」するにしても、「個人の有限の命と人類の無限の命」との間の断層を跨ぎ越して無媒介に結合させてしまうなら、未来社会の建設という目的の前で必ず「個人の有限の命」は「人類の無限の命」に従属させられてしまうような、全体主義的な思想を内包していることが見て取れる。

山城氏が黄の同書から、《人よ！ / あなたは万能の力をもった / 宇宙の主人 / ただあなただけが果てしない苦難の行軍に打ち勝ち / 自身の運命をその手に握り / ただあなただけが寒々としたこの世界に / 喜びと希望を与え / 価値なき世界に永遠なる生命を与えたのだから / あなたにできないことがあるのか》という、山城氏からすれば、「文学」を秘めた《ナイーヴな歌》(というより、なんとも稚拙な歌)を抜き出して、《「人間愛に溢れた壮大な」目的を持つこの「文学」的思想が、今日の北朝鮮の「暗愚、混沌、これ以上はないというほど粗野で盲目的で人間不在のもの」と無関係ではない》というのを聞くと、黄が確立した、現実の中で生きる具体的な人間が不在している主体思想から今日の北朝鮮の末期的症状が生み出されるのは必然であるといわざるをえなくなる。先の人間賛歌が金日成や金正日賛歌にすり替わっていくような人間不在の歌であることから、そのことは容易に指摘できる。

もう一度ドストエフスキーがいていたことを振り返っておこう。おぞましいリンチ殺人を起こしたのは無教養な不良連中ではなかったと彼がいうのは、リンチ殺人にかかわる「高邁な理念」に不良たちは無縁であるほかなかったからだ。人類の未来に関する「高邁な理念」を抱くのは、教養ある純粋な若者たちであった。彼らが「高邁な理念」を抱いたから、あるいはその「高邁な理念」が彼らの手に余るほどの大きいものであったから、リンチ殺人が起こされたわけではない。彼らが抱いた「高邁な理念」には抽象的な人間が記号として抱え込まれていても、具体的な人間が現実的に呼吸することの出来る場所がかかえこまれていなかったの、その人間不在の「高邁な理念」を現実の中

で追求しはじめると、どうしても人間不在の活動としてリンチ殺人などが生起せざるをえなくなってしまうのだ。

このリンチ殺人の中心人物であるネチャーエフは、バクーニンとの共著といわれる『革命家の教義問答』の冒頭から、「革命家はすでに死刑を宣告された人間である。彼は名前をもたない」と切り出し、社会的不道徳であろうと何であろうと、革命に役立つためにはすべてを最大限に利用し、現行秩序の徹底的な破壊を目指す言説に貫かれている。この『革命家の教義問答』が死者の書であるように、生きた人間はそこでは一人も呼吸できなくなっている。ネチャーエフの「高邁な理念」がそのような死者の理念でしかなかったなら、彼が主導する組織の中で少しでも呼吸しようとする者たちが革命家失格の烙印を押されて、粛清されるに至るのは目にみえていた。裏を返せば、彼の組織は粛清によって成り立っているような組織であったとみなされる。

ドストエフスキーは、教養ある青年たちが抱く「高邁な理念」に押し潰されてリンチ殺人に至ったわけではなく、おそらく彼らの抱いた「高邁な理念」の中身を問題にしていた筈であり、人間不在の「高邁な理念」を現実の中で適用させようとするなら、生きた人間は誰一人として存在しえなくなることを見通していたのだ。ヨーロッパの進歩思想家たちが掲げる「人間愛に溢れた壮大な」目的にしても、その「人間愛」なるものは抽象的な「人間愛」であって、生きた具体的な「人間愛」ではありえなかったから、抽象的な「人間愛」が崇高に掲げられる中で一人一人の具体的な人間が現実的に抹殺されていくという凄惨な事態が惹き起こされる。人類の未来に関する「高邁な理念」であれ、「人間愛に溢れた壮大な」目的であれ、そこでは具体的な人間が現実的に呼吸できるようにはならないし、その場所も全く用意されていない。つまり、死者としてしか入っていけない。

この点を振り返っておきたかったのは、山城氏が、『楽園を建設しようとするヒューマンな人間が地獄を来してしまう』という点に、あまりにも過剰に人間存在の《最も不可解なおぞましい謎》を見出しているのが感じられたからにほかならない。《楽園を建設しようとするヒューマン》さは、楽園建設のために人々を強制的に駆り立てる地獄のヒューマンさでもあった。人間というものの不可解な謎を覗き見ようとする山城氏の過剰さは、黄の主体思想に言及したときによりあらわになってくる。

《じっさい、人間中心に歴史を見、人類の発達を睨む主体思想を誤りなく着実に実現してゆけば、ついには「永遠なる人民の楽園」が建設されるものだろうか。歴史は、人間は果たしてそのように単純なものだろうか。ドストエフスキーが、むしろ、そうした「人間愛に溢れた壮大な」思想からこそ否応なく「奇々怪々な悪事」が結果すると断言したのは、歴史をシニカルに見たからでも、予言を試してみたかったからでもない。ただ、この現実としての逆説に、理解を絶する恐ろしさを直覚していたからである。歴史において人間はなぜこのような奇怪な屈折を強いられるのか、と。》

もちろん、《主体思想を誤りなく着実に実現してゆけば》、「永遠なる人民の楽園」と

は反対の、「奇々怪々な悪事」へと必ず行き着く。それは主体思想が、《人間中心に歴史を見、人類の発達を睨む》ような思想であったからでは、けっしてない。主体思想がそのような思想とは全く無縁であったからだ。主体思想のお粗末さは、一人一人の具体的な人間のお粗末さの比ではない。つまり、あまりにも脆弱で空想的な主体思想は現実的な人々を排除することによってしか成り立っていない代物としかいいようがないのだ。山城氏はどうして、主体思想がどのような「人間愛に溢れた壮大な」思想であるのかを不問に付すのだろう。《人間中心に歴史を見、人類の発達を睨む》とされる主体思想そのものの内容が、とてもそんな水準と質を備えていないことをどうして覗き込まないのだろう。愚劣な思想に導かれた人間が愚行を使命として率先するに至るのは、自明なことではないのか。

主体思想が愚劣であるのはもちろん、それが全体主義のイデオロギーそのものにほかならないからである。主体思想を貫く「人間中心」の「人間」が、北朝鮮社会における金日成 金正日独裁のもとでの少数の特権階層と膨大な被支配的な下層庶民階層との圧倒的な格差を抜きにした、そして現実的には不可能な《自身の運命をその手に握》る、どこにも存在しない空想的な人間に収斂していくなら、その「人間中心」の「人間」が現行の北朝鮮社会の中で、現実的に《自身の運命をその手に握》ることのできる独裁者金日成 金正日個人に代表されていくことになるのは避けがたかった。同様に繰り返すと、《個人の有限の命と人類の無限の命》の結合が、《個人の有限の命》の中に《人類の無限の命》が覗き込まれることによって《個人の有限の命》が至上とされていくのとは逆に、単なる機械的な結合とみなされていくなら、《個人の有限の命》が《人類の無限の命》の中に解消されていくのは必然であった。。

少なくとも主体思想のような全体主義のイデオロギーを掲げた北朝鮮においては、《歴史において人間はなぜこのような奇怪な屈折を強いられるのか》という問いが湧き起こる余地はない。この問いは主体思想のような全体主義イデオロギーではなく、真に人類の未来に関する「高邁な理念」の前でこそ提出されなくてはならない問いであろう。山城氏は黄の回顧録の前にドストエフスキーを登場させて、こう語らしめる。《個人の有限の命と人類の無限の命を結合させて、みな一緒に生きがいをもって生きる未来社会を建設しようというあなたの主体思想の目的が人間愛に溢れた気宇壮大なものであることを私はいささかも疑わない。しかし、あの腐り切った矮小な独裁者に代えてあなたのように高潔で心の清らかな純朴な人物に、古い社会を破壊し新たに建設し直す万全の機会を与えたとしても、そこからはやはり、暗愚、混沌、これ以上はないというほど粗野で盲目的で人間不在のものが出来て来て、その建物は、完成する前に、人類の呪詛のもと瓦解するにちがいない、と。》

誤った主体思想を掲げているかぎり、指導者が《腐り切った矮小な独裁者》であろうと、《高潔で心の清らかな純朴な人物》であろうと、誤った思想に導かれて地獄へと突

き落とされていくことになるのは間違いない。ここで湧き上がってくる根本的な問題は、では誤っていない「高邁な理念」というものはありうるか、ということだ。《黄は、腐敗しきった金正日の独裁体制が主体思想を政治的に利用してその精神を歪めた挙句、人々にこの世の地獄を強いている現状に心を痛み、自らの家族を犠牲にしても単身亡命して金正日体制崩壊のために命懸けで闘っている人》であるとして、彼は依然自らが作り確立した主体思想を信じている。黄からすれば、主体思想を掲げた北朝鮮がこんな体たらくに陥っているのは、主体思想の所為ではなく、あくまでも《主体思想を政治的に利用してその精神を歪めた》金正日独裁体制の所為であるだろう。

黄は金正日に代わって、自らが指導者として北朝鮮の建設に着手し、その事業に失敗するまでは自らの主体思想とは訣別しないだろう。いや、その場合でも主体思想は間違っておらず、金正日がそうであったように自分が間違っていたと思ひ込むかもしれない。自分が作った思想であるにも関わらず。「高邁な理念」は誰かがそれを握りしめて現実の中に入っていく、うまくいかなくなったときに初めて疑われるが、現実から遠く離れて聳え立っているあいだは疑われることはない。その場合でも、「高邁な理念」のほうは無傷ですりぬけて、失敗の責任を人間に押し付けることがしばしば起こりうる。また、「高邁な理念」が問い直されるのは、その理念を背負った人物や集団がおぞましい愚行に陥ったときであるという意味では、後知恵であることも明白である。凄惨な事態に行き着くまでは、「高邁な理念」は少しも疑われはしないのだから。

したがって、私が主体思想が誤った全体主義イデオロギーであると指摘することも、北朝鮮の末期的な現状を視野に入れた上での後知恵であることを自戒しておかなくてはならない。主体思想がどのような「高邁な理念」であるかをこれまで問わなかった山城氏も次の個所を見ると、さすがに思想そのものを問題にせずにはいられなくなっている。《「個人の命よりは家族の命がより大切だ。家族の命よりは民族の命がより大切なのだ。民族の命よりは人類の命がより大切なのだ」という信条を実践的に貫いて、自分をも家族をも犠牲にし民族統一と人類発展のために金正日と戦っている黄長燁個人の「主体」は尊敬に値する。しかし、主体思想は、本当は地上に楽園を建設しようとする人類愛に溢れた壮大な思想だったのに金正日から一部の腐敗した権力者の愚昧によって歪められ矮小化されたため、おぞましい地獄が現出してしまったというストーリーを我々はもはや信じるわけにはいかない。酷な言い方になるが、むしろ逆に、じつは現実に出来しているあの地獄こそ、「人間中心」のヒューマンなこの思想がその無意識において秘めていた欲望の対象、目的だったのかもしれないのである。》

非常に及び腰な物言いである。主体思想こそ独裁者の都合に合致するような「高邁な理念」であり、北朝鮮国民を地獄に突き落としていくような全体主義イデオロギーであると断言してもよかったのだ。人類の命よりは民族の命がより大切であり、民族の命よりは家族の命がより大切であり、家族の命よりは個人の命がより大切であることの逆コ

ースを辿って、目にみえない人類愛のために目の前の個人を抹殺することが明らかな黄個人の「主体」が《尊敬に値する》などとは、シニカルにしか聞き取ることはできない。個人の命を大切にすることによって、人類の命を大切にするという考えではなく、比較級的に人間の命が抽象化されていくところに、すでに個人の命にとっての地獄が用意されているのをみなければ、一体なにをみればよいのだろう。

山城氏の及び腰に対しては後の展開で決着を迫られる必要がやってくるのが予測されるとして、彼は《主体思想が黄の内に芽生えて固有の哲学原理として形成されて行った》プロセスと、《「地上の楽園」の建設という帰還事業》の推進とが並行していたことに注目する。この事実は、帰還事業を推し進めることになったのが主体思想であったという推測を引きずりだしてくれる。主体思想が現実の中で追求されていく一つとして帰還事業が構想されたとすれば、山城氏がいうように、《「永遠なる人民の楽園」、「みな一緒に生きがいをもって生きる未来社会」を建設することを目指す主体思想が、中央で本気で信じられていた時期があったのであれば、その末端に「地上の楽園」という誇大なスローガンが掲げられたとしても、それは、ひとを欺いて共和国に呼びよせるための二セの看板というわけではなかっただろう。》

山城氏の指摘は、《「地上の楽園」という誇大なスローガン》に《ひとを欺いて共和国に呼びよせるための二セの看板》を見出した我々日本人の多くの捉え方に根底から再考を促している。《一年半ほど前、まだ拉致問題が過熱して論じられていた頃、この問題をいわゆる帰還事業まで遡及して、「地上の楽園」という美名のもと、或る種の連中が人々を「この世の地獄」へと誘い出したり送り出したりしたのは誘拐同然、拉致同然の犯罪だと糾弾する議論があったことをここで思い出そう。ここには、歴史を事後から振り返る遠近法に付きものの錯覚がある。それは、現在から過去を顧みてそう見えるにすぎない。》

「地上の楽園」という美名で多くの在日朝鮮人を欺いて共和国に呼びよせたという捉え方には、隠蔽されているものがある。ドストエフスキー流に言えば、なにも北朝鮮を擁護したいからではない。欺かれたという観点からは、帰還事業の《本当の恐ろしさが見失われてしまうからだ》ということになるだろう。

《まず、1959年当時の北朝鮮がこの世の地獄であったわけではない。これまでに数百万人の餓死者を出している今の北朝鮮をこの世の地獄と形容するのは分らぬでもない。しかし、帰還事業が始まったのは、この国が農業協同化を終え、社会主義経済体制の基盤を確立したばかりの頃である。黄長燁は、帰還事業に触れて「当時の北朝鮮の生活は悪くはなかったのです。精神面でも道徳面でも健全でした。泥棒がないので家に鍵をかける人もいなかった」と言っている。「帰国者を迎えようとした最初の目的は、けっして悪くなかった」(前掲書)と。日本に在留している同胞を呼び戻して地上の楽園を建設しようという意志において、彼らに疑念も後ろめたさもなかったのだ。》

黄がいうように、帰還事業「当時の北朝鮮の生活は悪くはなかった」かもしれない。

だから、帰還事業の「最初の目的は、けっして悪くなかった」ことは信用してもよいかもしれない。人類の輝かしい発展を謳った主体思想が全国民に浸透しさえすれば、「地上の楽園」の建設は可能であるという目論見のもとに帰還事業に着手したのかもよい。しかし、「地上の楽園」は思い通りにはいかなかった。では、帰還事業は中止したのかといえば、そうではなかった。黄が帰還事業の「最初の目的は、けっして悪くなかった」というとき、途中から悪くなったという意味合いが言外に含まれている。帰還事業の目的が「地上の楽園」構想が破綻するほどに経済的にも政治的にも社会的にも、おそらく国内のあらゆる面で行き詰ってしまったとき、すでに帰還している同胞を人質にして日本に在留している同胞から金品を送らせるという悪どい手口に変質してしまったのだ。

もはやニセの看板に成り果てている「地上の楽園」の美名に引き寄せられる在日朝鮮人を人質にとるという発想が、「よど号」の日本人の若者たちが自分たちの懐中に飛び込んでくるという意外な展開を経て、日本人拉致事件に手が伸びていく範囲内にあったという推測が容易に成り立つが、この帰還事業の変質を前に主体思想はどうしていたのか、どこにいたのかということがどうしても問われなくてはならない。主体思想がけしかけたかもしれない帰還事業が当初の「地上の楽園」の建設の挫折に直面したとき、主体思想はその挫折をどのように受けとめたのか。本当は主体思想も挫折を免れえなかった筈だ。帰還事業と共に主体思想も挫折することによって、帰還事業も主体思想も共に倒れて二度と起ち上がれなくなるか、あるいは挫折を乗り越えて甦ってくるか、のいずれかの方途しか考えられなかった筈なのに、帰還事業は「地上の楽園」の建設という当初の目的を裏切ったかたちで変質し継続されていったのである。

主体思想はそのグロテスクな変質と闘ったわけではなく、おそらくその変質を推進していったにちがいない。「地上の楽園」の建設が座礁して祖国が危機に瀕したとき、「人間愛に溢れた壮大な」主体思想はなによりもまず窮地に陥っている祖国の救出に全力を挙げた筈である。祖国の経済的危機を前にして、帰還事業で呼び戻していた在日朝鮮人を人質にして、日本に在留している彼らの家族から生活費を送金させることもやむをえなくなっていったのだ。そうなると帰還事業は「地上の楽園」という《ニセの看板》を掲げて、帰還者を騙すために実施されるようになっていくことになる。このマイナス面もいつかは克服して、主体思想は真の「地上の楽園」の建設に着手していくことになるだろう、という考えであったかもしれない。しかしながら、主体思想の「人間愛に溢れた壮大な」理念は、帰還事業という「地上の楽園」の建設構想が破綻したときにこそ貫かれなければ、何の意味も価値もなかった。

主体思想が真に「人間愛に溢れた」ものであったなら、帰還者を地獄に突き落とすようなことはしなかった。「地上の楽園」の建設事業に憧れて、日本での何もかもを捨てて帰還した彼らのような存在にこそ、「人間愛」を示さないのであれば、一体誰に「人間愛」を溢れさせるといえるのだろうか。帰還者を待ち受けていた地獄が、やがて北朝鮮国

民が味わうことになる地獄であるのは火を見るよりも明らかであったし、実際そうだった。それが「人間愛に溢れた」主体思想が覗き込んでいる現実の姿であった。「人間愛に溢れた」主体思想など掲げなければ、「地上の楽園」の建設という質の悪い冗談が独裁者の頭を占拠することもなかったし、したがって帰還事業が現実化することもなかった。帰還事業の「最初の目的は、けっして悪くなかった」という問題ではなかった。「けっして悪くなかった」ことを導入部として、悪くなっていくプロセスの中に主体思想が鳴り響いていることが問題であったのだ。

《自らの家族を犠牲にしても単身亡命して金正日体制崩壊のために命懸けで闘っている》黄長燁が、彼の主体思想と共に地獄の帰還事業に加担してきたことは紛れもなかったし、「最初の目的は、けっして悪くなかった」という彼の言葉から、主体思想を無傷で通過させてきたことがわかる。彼が打倒しようとしている金正日体制と同じ穴の貉ではないかという感想が募ってくるが、帰還事業の地獄を覗き込めば覗き込むほど、「地上の楽園」の看板に魅せられ、藁をもすがるようにして飛びついていった在日朝鮮人が置かれていた日本の地獄も覗き込まなければ片手落ちではないか、と山城氏は指摘する。

《地上の楽園という誇大宣伝は確かにあった。だが、単に向うは楽園だからと言うただそれだけの理由でそこに飛びつくほど人間は単純なものではない。にもかかわらず、そこに飛びついたとすれば、飛びついてもおかしくないような、足元の条件が彼我にあったらう。たとえば、高度経済成長に入る前の 1959 年当時、日本自身がどんな状況にあったか。その日本社会にあって在日朝鮮人／韓国人がどういう境遇にあったのか。彼らに向うが楽園と見えてしまうような地獄がこちらになかったかどうか。向うが楽園というのはあり得ぬ大げさな誘い文句だとは知っていても、それでも今、この日本に留まって差別と不平等に甘んじて労苦を強いられているよりはましだと思っても不思議でないような条件が彼我にあったはずである。》

山城氏はここで北朝鮮の帰還事業の地獄を少しでも擁護する意図から、「地上の楽園」という美名に飛びついていった在日が置かれていた日本の地獄に目を向けようとしているわけではない。帰還事業の地獄を見つめるとき、同時に日本の地獄も見つめなければ、人間が被るやりきれない悲劇の全体は迫りあがってこないではないか、といているのだ。つまり、「地上の楽園」という誘い文句は誘われる土壌の地獄をも浮き彫りにしていたのである。いうまでもなく他の地獄から救出する手綱がもっと凄まじい地獄への入り口であったという残酷な仕打ちは当然、肝に銘じておかななくてはならない。

氾濫しているグロテスクな北朝鮮報道は、非人間的な独裁体制からもたらされる地獄ばかりに視線を注ぐが、「高邁な理念」が《この上なく忌まわしく厭らしい行為》として顕現してしまう、真に恐ろしい《人間という不可解な函数》を覆い隠してしまっているだけだ、と山城氏は文章を結ぶ。ここから理想はどうして現実の中で追求されるや、地獄になってしまうのかという問いが露出しているのが感じられるが、この問いに答えておかな

ければ、いつまでも我々は《人間という不可解な函数》に直面しつづけなければならない。

先に主体思想をみてきたように、誤った思想は誤った場所に必ず人を導く。したがって、まず理想というものの質や水準が見極められる必要がある。バカな思想にしてやられないことだ。その上で考えると、理想に取り憑かれた人間はあるがままの現実を理想へと行き着くべき現実として転倒させてしまうところに、最大の原因が潜んでいると思われる。あるがままの現実が彼によって、理想から逆規定された現実としてフィクション化され、理想を実現しようとする人々はそのフィクション化された現実の中で理想を担う人間にふさわしい生き方をどうしても迫られることになるのである。理想とかけ離れた現実の中で理想が一挙に実現されてしまったかのような、困難で奇形的な生き方を各々がしいられるのであるから、脱落や破綻は目にみえている。脱落や破綻が生じて理想が現実に合わせて修正されねばならなくなっているのに、脱落者は理想を担う主体の弱さとみなされて肅清を余儀なくされていく。

理想はもはや地獄に直面して破綻してしまっているにもかかわらず、このような地獄を切り抜けることによってこそ、輝かしい理想が自分たちに微笑むという倒錯した心理と論理が生みだされていく。非情な困難を切り抜けずにどうして理想に近づくことができよう、といった倒錯した心情の中で仲間や同志は切り捨てられていくのだ。理想に合わせた生活に踏み込んでしまったために、フィクション化された生活が悲鳴を上げている状態を克服することによって、理想へと一歩近づくと思込まれるのである。ドストエフスキーが『カラマーゾフの兄弟』の中の「大審問官」物語で提示したのは、理想は人間を少数の「選ばれたる者」と、奴隷状態を自ら望む膨大な「いくじのない」人間とに分かつということであった。ドストエフスキーにいわせれば、《みな一緒に生きがいをもって生きる未来社会》の建設を唱える主体思想など、笑止以外のなにものでもなかった。

主体思想という理想そのものがすでにそれを担おうとする者と、それに従う者とを分かつたはずにはいなかったから、《みな一緒に》という考え自体が空想にほかならなかった。

《みな一緒に》戦争のない平和を目指せば……、《みな一緒に》足並みを揃えれば……、一体そんな《みな》はどこにいるのか。どこにもいない《みな》の出現によってしか成り立たない主体思想はしたがって、空想的な思想でしかなかった。ドストエフスキーの大審問官は自分たちの目の前に現れたイエスにむかって、気ちがいの戯言がいやになったから、「選ばれたる者」にしか手を差し伸べない「おまえの仕事^{しごと}を訂正した人々の群れに投じ」、悪魔と手を結んで理想に耐えられない膨大な人々を支配し、救ってやったのだという。理想が人々を滅ぼすことを知るなら、いかにして理想から人々を引き離すか、つまり、理想を抱くことのない生活に人々を縛りつけることが唯一人々を救う方法である、とドストエフスキーは、《暗愚、混沌、これ以上はないというほど粗野で盲目的で人間不在》の巨大な嵐を予感させているロシアの社会主義革命の前に、反語的に全力を挙げて論じていたのだ。

2004年9月8日記